アーカイブズ

子ども・母親・保育者

守永英子

―『幼児の教育』第八十四巻第四号（一九八五年）から―

四月、新年度が始まると、又、新しい子どもたちとの出会いがある。そして、子どもをはさんで、その親とも出会う。

子どもたちの有りようがいろいろであると同様に、親の方もいろいろである。

新しい集団生活の中で、すぐに友だちを作れる子ども。友だちの誘いに、おずおずと応じる子ども。自分の興味に突き動かされて遊び始める子ども。母親から離れられない子ども……など、さまざまである。

母親の方も、「私、べたべたするの嫌いなんです」と至極あっさりとしている親。黙って、にこにこと見守る親。母親から離れられずに泣く子どもを抱きあげ、抱きしめる親。言いきかせて、自分から引き離そうとする親。子どもの動きを待たずに、先に指示してやらせようとする親。自分で手を出して世話をしてしまう親。まことにいろいろである。

いろいろな子どもと、いろいろな親と、保育者という組合せの中で、この出会いが、〝子ども〟にとっても、〝親〟にとっても、〝保育者〟にとっても、〝よい出会い〟となってほしいと願う。

保育者と親、それは、共に〝子どものよき成長発達を願って〟出会うものと思われるのに、この関係は、必ずしも、初めから円滑にいくとは限らない。私にも、苦い経験がいくつもある。

私たちの園では、年に一、二度、担任がひとりひとりの子どもについて、親と話し合う機会を持つ。若かった私は、一生懸命に、園で

のY夫の様子を話し、親に協力を求めた。その時点では、事は順調に運んだかに思えた。しかし翌日、Y夫は私に言った。「先生、昨日、ママに、ぼくの悪口言ったでしょ。」

このY夫の言葉は、大変に衝撃的で、二十数年経った今も、私は、その時のことを、ありありと思い出すことができる。子どもが、そのような受けとめ方をするのは、母親の言い方が悪い、ときめつけることは簡単である。が、どのような理由があるにせよ、こういう結果を生じたことは、保育者として、自責の念にかられる。私の言ったことを、〝親自身の取り組むべき課題〟ととらえないで、〝教師に言われた〟ととらえたために生じたことと思われる。

J子の場合、その〝ひがみ〟の原因を、私は、その生育歴の中に探し求めた。しかし、母親の話の中からは手掛りを得ることができなかった。原因の分らないままに、私は、J子のひがんだ行動によって私たちの関係が壊れてしまわないように努力する外はなかった。J子は、かわいがられることが必要な子どもと思われたから、私も極力そのことに努力した。年長組になってしばらく経ってから、J子は「先生、J子をかわいくないでしょ」と私に問いかけてきた。それは、ひがんだ言い方ではなく、自分への愛情を確めたい様子に思われたので、私も「かわいいわよ」と答えたが、事実、その頃から、J子は次第に素直さを取り戻し、他の保育者たちが「J子ちゃん、とてもいい表情になったわね」と気づくほどに変ってきた。

「実は、J子の祖母が近くにいるのですが、兄の方をかわいがりまして、二人で遊びに行っても、J子だけ先に帰されてしまうのです」と、母親が話してくれたのは、卒業が間近になってからである。これなら、J子がひがむのも当然ではないか。私が原因を探し求めて

いるときには、話してくれなかったことを、この時期になって話してくれたのは、卒業が近いという安心感からであろうか。それとも、J子の様子が、望ましい方向へと変ってきたことによって生じた心のゆとりであろうか。

H夫は四才で入園してきた。三年保育の二年目の組に混じるので、H夫が部屋の中でじっと腰かけている姿は、かなり目立つものであった。登園も遅く、働きかけても、はっきり反応しない。何とかしなければ、という思いで、母親に、もう少し早く登園するように求めたが、あまり改善もされない。親のグループでの話し合いの時、もう一度念を押すと〝H夫は物を作ることが好きで、朝起きてから登園までの間に製作を始めてしまうので、家を出るのが遅くなる〟とのことであった。「製作は好きなようですね」という私の肯定に、「その点を買っていただかなければ」と開き直った母親の態度には少々驚いた。登園時間は、何回か早い日もあったが、大体は、皆が既に遊び始めてからであった。それでも、二年間の在園の間には、彼なりに、友だちや保育者にも親しみ、自分の活動もできるようになり、楽しそうな表情も見られるようになった。卒業が近くなって、母親が打ち明けた。「H夫は、三年保育ではいっていた幼稚園では、登園拒否だったのです。」

この二年間、母親も心配だったであろうが、私も随分と気をもんだものであった。J子にしても、H夫にしても、もっと早く事情を聞かせてはもらえなかったものだろうか、と思う。安心して話せるほどの信頼感が、保育者に対して、なかなか持てなかったのだろうか。子どもの様子に安心感が持てるようになったとき、初めて、事情を話す心のゆとりが生まれてくるのだろうか。

子どもに問題を感じる時、親と話し合って協力を求めるのは、通常のやり方であろう。

しかし、場合によっては、問題を指摘されることで、親が防衛的になることもある。例え親の協力が確信できなくても、保育者はひとり、忍耐と努力で、課題に立ち向かわなくてはならない。職業的責任感が保育者を支え、自分が変ることで、事態を少しでも好転させようと考える。ひとりで取り組まなくてはならない孤独な仕事である。

これは、立場を逆にすれば、母親の側にも言えることかもしれない。保育者が、子どもの持つ問題点を指摘し、母親の側に努力を求めるだけで終るならば、母親にとっても、孤独な仕事となる。〝子どもの望ましい成長発達を〟という同じ願いに向っている親と保育者である。両者が、心を通わせて、歩調をそろえれば、もう少しうまくいくのではないか……と思う。

もう立派な社会人となっているS夫の母親は、「初めての子どもで、何も分らず、随分先生にはいろいろなことを伺って、勉強させていただきました」と今でも感謝してくれる。社交的な含みがあるにしても、実際、保育の後、よくいろいろと意見を求められたことが思い出される。〝保育者に協力する〟というよりも、〝自分の考えを育てるために〟周囲のものを上手に利用したと言える。

考えてみれば、幼稚園で、保育者が子どもと共にあるのは、高々二、三年。それに比べ、母親は、密に、長く続く関係である。保育者の主導のもとに協力するというよりも、やはり、母親自身の、子どもを見る目、育てる力を養うことが大切である。子どもの姿から、子どもが現在ぶつかっている課題は何か、乗り越えなければならない課題は何かをとらえ、それに対して、母親自身の果すべき役割を考える姿勢を、母親が持つことは、今後も、長く役に立つことである。

そして、母親を、そのように仕向け、支え

るのは、保育者の仕事の一つであろう。保育は、子どもを直接に育てるだけでなく、子どもに大きな影響をもつ母親への働きかけも含むものである。子どもと母親の関係の中で、子どもを変えたいと思う時に、母親が変ることで子どもが変ってくるように、母親と保育者の関係の中で、母親を変えたいと思う時には、先ず、保育者自身が変ることが必要であろう。

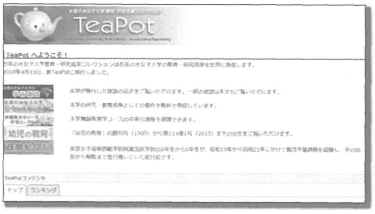
幼稚園は、〝子どもを育てる場〟であると同時に、〝親も、保育者も共に育つ場〟でありたいものである。

（お茶の水女子大附属幼稚園）

幼児の教育 バックナンバーを WEBページで公開中

「幼児の教育　TeaPot」で

検索



お茶の水女子大学 教育・研究成果コレクションTeaPot
https://teapot.lib.ocha.ac.jp/　の中にあります。

明治34年発行の創刊号から、現在、平成27年発行の第114巻第1号までご覧になれます。